

中学生におけるSignificant Others

大 城 亘 武

要 旨

本稿の目的は、次の3点について検討することである。

- ①中学生にとって誰がsignificant othersであるか、
- ②significant othersとしての父、母、親友、ホームルームの担任の先生に対する親しみ順位はどうなっているか、
- ③親子関係要因と親しみ順位の関連はどうなっているか

調査協力者は中学生男女1088人である。記入漏れのあったものは、分析から外した。

主な結果は次の通りである。

誰がsignificant othersであるかについては性差があり、男子においてはスポーツ選手 (42%)、芸能人 (23%)、女子においては、先輩 (31%)、芸能人 (26%)、母 (26%)、同性友人 (23%) であった。

親しみの平均順位は、母、親友、父、HR担任の先生、の順であった。

親しみを感じることを説明する親子関係要因は「よく話をする」であった。

カテゴリーカル回帰分析の結果は、次の通りであった。

父—男子：多重R=.518、R²乗=.269、p=.000 n=330

父—女子：多重R=.491、R²乗=.261、p=.000 n=282

母—男子：多重R=.505、R²乗=.255、p=.000 n=330

母—女子：多重R=.402、R²乗=.162、p=.000 n=288

はじめに

Significant Others (重要他者) は例えば、個人の人生に情緒を伴って深い影響を持つ者である、と説明される。(Anderson, S. M., Chen, S., 2002参照)。両親、兄弟姉妹、親友・友人、恋人、教師などである。

安達、菊池、木村 (1987) は、大学の2年生および3年生男女を対象に大学生の生活に及ぼす他者 (意味ある他者) の分析を行い、自己の生き方に影響を与える人として、父親、中学時代の教師、高校時代の教師および大学の教師が選ばれたことを報告している。

天野、安里、新城、上田 (2001) は、自己開示性と重要他者との関係を短期大学生女子を対象に検討し、友人がもっとも自己開示できる存在であること、重要他者の順位は、友人、母親、きょうだい、先輩、父親の順であることを見出した。

比嘉、高良、岡本 (2005) は、大学生男女を対象に重要他者と未来展望の関係を調べた。「意味ある他者」のある者は、自らの未来をポジティブに捉え、また思い描かれる未来も他者との関わりの中に自分を位置付けるといふ。

松田、若井、小嶋 (1995) は、高校生の発達における重要他者との関わりについて日米比較を行った。重要他者 (メンター) の役割は、アメリカの高校生の場合にはほとんどの者が両親挙げているのに対し、日

本の高校生は両親を挙げて入るものの、それ以上に仲間を挙げており、また、教師を挙げているという結果であった。

以上は、大学生や高校生を対象とした研究であった。中学生段階では、Significant Othersはどのように評価され、また認知されるであろうか。

本研究の目的は、中学生が①生き方のモデルとして誰をSignificant Othersとしているか、②Significant Othersとしての両親をどう認知しているか等について検討することである。

方 法

1 調査対象：沖縄県内の3つの中学の1～3年生1088人 (男子584人、女子504人) である。

2 測定具：中学生の日常生活意識を把握する目的で設定されたデモグラフィック項目を含む全34設問で構成されるアンケート用紙を用いた。本報告では、①「このような人になりたい (このような人の生き方をしたい)」人物を18項目設定し、選択させた。また②父、母、親友、ホームルーム担任の先生をSignificant Othersとして設定し、これらのSignificant Othersについて親しみを感じる順位をつけてもらった。さらに、親しみを感じる要因として、親子関係に関する10項目を設定した (表1および表2参照のこと)。父親

表1 このような生き方をしたい人物(%) n=939

人物	全体	男子	女子
先輩	22.9	16.2	30.6
芸能人	24.4	22.8	26.3
母親	16.9	9.3	25.8
同性友人	16.3	10.7	22.8
父親	17.7	20.0	15.0
スポーツ	28.4	42.2	12.4
学校先生	11.8	11.5	12.2
祖母	7.6	4.6	11.1
姉妹	5.4	1.2	10.4
歴史上	15.1	20.4	9.0
マンガキャラ	9.5	9.9	9.0
親戚おば	4.5	1.8	7.6
祖父	7.5	8.3	6.5
塾先生	4.8	5.0	4.6
兄弟	4.9	5.3	4.4
異性友人	3.7	4.0	3.5
親戚おじ	4.2	6.1	1.8
家庭教師	1.4	2.2	0.5

または母親との関係が、それらの項目に当てはまるか否かを問うた。当てはまる場合は1、当てはまらない場合は0とした。なお、統計分析に当たっては、当てはまる場合を1、そうでない場合は2とした。

3 手続き：調査は各中学校の各ホームルーム担任を介して、調査の目的、記入方法を説明し、試験ではないこと、成績とは無関係であることを説明した。

4 調査の実施：2007年10月から11月にかけて実施した。

5 データの処理：SPSS for Windows v.13により統計処理した。「このような人になりたい（このような人の生き方をしたい）」人物の選択数および選択比率を算出した。「親しみを感じる順位（Significant Others）」を従属変数、親子関係項目を説明変数としてカテゴリカル回帰分析を施した。親しみの順位が小さいほど親しいことを表す。両親が揃っているケースのみを分析対象とした。両親以外のキンシップ要因の有無は検討していない。また、友人（親友）の有無についても分析から除外した。

結果と考察

1 「このような人になりたい（このような人の生き方をしたい）」人物

「このような人になりたい（このような人の生き方をしたい）」人物を生き方モデル対象として、18人物を設定し、それぞれの人物についてモデルとするかを

問うた。表1に、結果を示した。表に見るように、スポーツ選手、芸能人の選択率が高い。以下先輩、父親、母親と続く。同性友人、歴史上の人物、学校の先生が10%台の選択率となっている。マンガのキャラクターが上位10番以内に選ばれているのが注目される。祖父、祖母、塾の先生、兄弟、姉妹、家庭教師等の選択率が低いのは、これら人物に該当者がいない、ということであろう。選択項目に「親友」「ホームルーム担任の先生」は設定していない。

全体的には上の通りである。次に性差について検討する。表2から表19にクロス分析の結果を掲げた。カイ2乗検定の結果、18項目中11項目で有意な関連が見出された。以下に掲げる。

- ①父親は、男子の選択比率が女子より高い。
- ②母親は、女子の選択比率が高い。
- ③祖母は、女子の選択率が高い。
- ④親戚のおじさんは、男子の選択比率が高い。
- ⑤親戚のおばさんは、女子の選択比率が高い。
- ⑥姉妹は、女子の選択比率が高い。
- ⑦家庭教師は、男子の選択比率が高い。
- ⑧同性の友人は、女子の選択比率が高い。
- ⑨先輩は、女子の選択比率が高い。
- ⑩プロスポーツ選手は、男子の選択比率が高い。
- ⑪歴史上の人物は、男子の選択比率が高い。

これらのうち、スポーツ選手をモデルとする比率は男女間の違いが大きく、母親、先輩および同性友人、歴史上の人物についても同様の結果である。

2 Significant Othersの親しみ順位

2.1 Significant Othersの平均順位

父親、母親、親友、担任の先生の平均順位について小数第2位を四捨五入して示すと、母親の平均順位は、1.8 (SD=.72)、親友は1.8 (SD=.92)、父親は2.5 (SD=.89)、担任は3.7 (SD=.59) であった。値が小さいほどより親しみを感じることになるので、母親、親友がより親しまれているといえる。つまり、平均順位スコアが小さいほどより重要他者として認知されているということである。

2.2 重要他者認知（平均順位）の性差・学年差

父親の場合

親しみを感じる順位について性と学年の要因による2元配置分散分析を施した。結果を表20に掲げた。父

表2 モデル対象：父親
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
父親	非選択	度数 性別の%	404 80.0%	369 85.0%	773 82.3%
	選択	度数 性別の%	101 20.0%	65 15.0%	166 17.7%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=404、df= 1、p=. 044

表3 モデル対象：母親
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
母親	非選択	度数 性別の%	458 90.7%	322 74.2%	780 83.1%
	選択	度数 性別の%	47 9.3%	112 25.8%	159 16.9%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=45. 175、df= 1、p=. 000

表4 モデル対象：祖父
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
祖父	非選択	度数 性別の%	463 91.7%	406 93.5%	869 92.5%
	選択	度数 性別の%	42 8.3%	28 6.5%	70 7.5%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=1. 177、df= 1、p=. 278

表5 モデル対象：祖母
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
祖母	非選択	度数 性別の%	482 95.4%	386 88.9%	868 92.4%
	選択	度数 性別の%	23 4.6%	48 11.1%	71 7.6%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=14. 133、df= 1、p=. 000

表6 モデル対象：親戚のおじさん
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
親戚の おじさ ん	非選択	度数 性別の%	474 93.9%	426 98.2%	900 95.8%
	選択	度数 性別の%	31 6.1%	8 1.8%	39 4.2%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=10. 817、df= 1、p=. 001

表7 モデル対象：親戚のおばさん
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
親戚の おばさ ん	非選択	度数 性別の%	496 98.2%	401 92.4%	897 95.5%
	選択	度数 性別の%	9 1.8%	33 7.6%	42 4.5%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=18. 513、df= 1、p=. 000

表8 モデル対象：兄弟
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
兄弟	非選択	度数 性別の%	478 94.7%	415 95.6%	893 95.1%
	選択	度数 性別の%	27 5.3%	19 4.4%	46 4.9%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=0. 470、df= 1、p=. 493

表9 モデル対象：姉妹
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
姉妹	非選択	度数 性別の%	499 98.8%	389 89.6%	888 94.6%
	選択	度数 性別の%	6 1.2%	45 10.4%	51 5.4%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=38. 300、df= 1、p=. 000

表10 モデル対象：学校の先生
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
学校の 先生	非選択	度数 性別の%	447 88.5%	381 87.8%	828 88.2%
	選択	度数 性別の%	58 11.5%	53 12.2%	111 11.8%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=0. 118、df= 1、p=. 731

表11 モデル対象：塾の先生
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
塾の 先生	非選択	度数 性別の%	480 95.0%	414 95.4%	894 95.2%
	選択	度数 性別の%	25 5.0%	20 4.6%	45 4.8%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=0. 060、df= 1、p=. 807

表12 モデル対象：家庭教師
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
家庭教師	非選択	度数 性別の%	494 97.8%	432 99.5%	926 98.6%
	選択	度数 性別の%	11 2.2%	2 .5%	13 1.4%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=5.042、df= 1、p=.025

表13 モデル対象：同性の友人
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
同性の友人	非選択	度数 性別の%	451 89.3%	335 77.2%	786 83.7%
	選択	度数 性別の%	54 10.7%	99 22.8%	153 16.3%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=25.130、df= 1、p=.000

表14 モデル対象：異性の友人
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
異性の友人	非選択	度数 性別の%	485 96.0%	419 96.5%	904 96.3%
	選択	度数 性別の%	20 4.0%	15 3.5%	35 3.7%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=0.165、df= 1、p=.684

表15 モデル対象：先輩
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
先輩	非選択	度数 性別の%	423 83.8%	301 69.4%	724 77.1%
	選択	度数 性別の%	82 16.2%	133 30.6%	215 22.9%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=27.444、df= 1、p=.000

親に対する親しみ順位は、性の主効果が有意であった。学年の主効果、および性と学年の交互作用は有意でなかった。平均順位は女子生徒 (2.80) > 男子生徒 (2.31) なので、父親に対しては男子生徒がより親しみを感じている、事になる。

母親の場合

親しみを感じる順位について性と学年の要因による2元配置分散分析を施した。結果は表21に掲げた通り

表16 モデル対象：芸能人
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
芸能人	非選択	度数 性別の%	390 77.2%	320 73.7%	710 75.6%
	選択	度数 性別の%	115 22.8%	114 26.3%	229 24.4%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=1.546、df= 1、p=.214

表17 モデル対象：プロスポーツ選手
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
プロスポーツ選手	非選択	度数 性別の%	292 57.8%	380 87.6%	672 71.6%
	選択	度数 性別の%	213 42.2%	54 12.4%	267 28.4%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=101.42、df= 1、p=.000

表18 モデル対象：歴史上の人物
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
歴史上の人物	非選択	度数 性別の%	402 79.6%	395 91.0%	797 84.9%
	選択	度数 性別の%	103 20.4%	39 9.0%	142 15.1%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=23.673、df= 1、p=.000

表19 モデル対象：マンガのキャラなど
クロス表

			性別		合計
			男子	女子	
マンガのキャラなど	非選択	度数 性別の%	455 90.1%	395 91.0%	850 90.5%
	選択	度数 性別の%	50 9.9%	39 9.0%	89 9.5%
合計		度数 性別の%	505 100.0%	434 100.0%	939 100.0%

Pearsonのカイ 2 乗=0.228、df= 1、p=.633

である。母親に対する親しみ順位は、性の主効果、学年の主効果、性と学年の交互作用いずれも有意であった。交互作用が有意であったので、単純主効果について検討した。学年別の性差の分析結果を表22に示した。1学年では有意でないが、2，3学年で有意となった。いずれも男子の親しみ順位が高い。すなわち男子がより父親に親しみを持っていることになる。性別の学年間差については、表23に示した。男子の場

合は学年の主効果が有意であり、1 学年 (1.711) < 3 学年 (1.90) = 2 学年 (2.00) となっている (図 1 参照)。女子の場合は、学年の単純主効果は有意となっていない (表23、および図 1 参照)。

3 親しみをもたらす要因

3.1 男子生徒の場合

父子関係を示す10項目を説明変数、父親の親しみ順位を従属変数としてカテゴリカル回帰分析を施した。結果を表24に示した。

多重R =.518、R 2 乗=.269 、 p =.000 n =330
このことからこの分析モデルは有意である事が分かる。標準回帰係数 (ベータを参照) が有意となった項目は、父親とよく話すこと、父親が気持ちを分かろうとすること、父親が温かいこと、父親が悩み事を聞いてくれること、父親がその考えを押し付けること (係数はマイナスになっている) である。父子関係が濃密であることが、親しみと密接に関係していることが示唆される。係数値の相対的な大きさから、特に「悩みを聞いてくれる」ことが親しみを感じる主要因であることが明らかになった。父親が期待をかけることや、

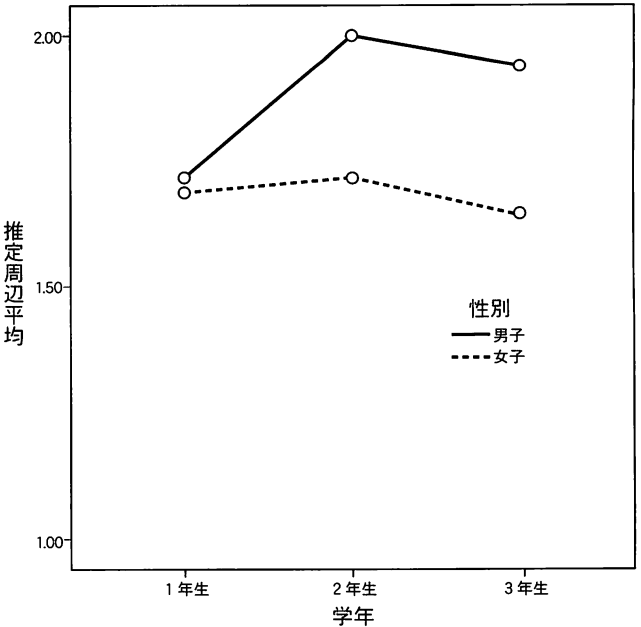


図1 親しみの平均順位 (性別*学年)

父親のような生き方をしたい、などは親しみの説明要因としては有効ではない。

母子関係を示す10項目を説明変数、親しみ順位を従属変数としてカテゴリカル回帰分析を施した。結果は表25に掲げたとおりである。

表20 被験者間効果の検定 父親の場合
従属変数：親しみ順位父

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	63.503 ^a	5	12.701	17.507	.000
切片	5828.226	1	5828.226	8033.880	.000
学年	2.378	2	1.189	1.639	.195
性別	53.948	1	53.948	74.364	.000
学年*性別	2.719	2	1.360	1.874	.154
誤差	655.087	903	.725		
総和	6523.000	909			
修正総和	718.590	908			

表21 被験者間効果の検定 母親の場合
従属変数：親しみ順位母

ソース	タイプ III 平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	17.364 ^a	5	3.473	6.752	.000
切片	2853.919	1	2853.919	5548.646	.000
学年	3.584	2	1.792	3.484	.031
性別	9.034	1	9.034	17.564	.000
学年*性別	3.266	2	1.633	3.175	.042
誤差	466.511	907	.514		
総和	3419.000	913			
修正総和	483.875	912			

表22 単純主効果の検定（学年別性差）

従属変数：親しみ順母

学年		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1 年生	対比	.054	1	.054	.105	.746
	誤差	466.511	907	.514		
2 年生	対比	6.957	1	6.957	13.526	.000
	誤差	466.511	907	.514		
3 年生	対比	5.865	1	5.865	11.402	.001
	誤差	466.511	907	.514		

表23 単純主効果の検定（性別学年差）

従属変数：親しみ順母

性別		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
男子	対比	6.854	2	3.427	6.663	.001
	誤差	466.511	907	.514		
女子	対比	.298	2	.149	.289	.749
	誤差	466.511	907	.514		

多重R =.505、R 自乗=.255 、 p =.000 n =330

このことからこの分析モデルは有意であり事が分かる。標準回帰係数（ベータ）をみると、母親とよく話すこと、母親が温かいこと、母親が折れてくれること、怒ると恐いこと（係数はマイナスである）が有意となっている。なお、何かと行動に口を挟むことは負の有意な傾向性を示している。これらの要因が母親への親しみ順位と有意に関連しているということである。とりわけ、母親とよく話すことが母親に親しみを感じる主要因であることが示唆される。

3.2 女子生徒の場合

父子関係を示す10項目を説明変数、親しみ順位を従属変数としてカテゴリカル回帰分析を施した。結果を表26に示した。

多重R =.491、R 2 乗=.261 、 p =.000 n =282

このことからこの分析モデルは有意である事が分かる。標準回帰係数（ベーター）が有意となった項目は、父親とよく話す、考えを押し付ける（係数はマイナス）、父と同じ生き方したい、であった。期待をかけている、は傾向性ありであった。とりわけ、父親とよく話すことが父親に親しみを感じる主要因であることが示唆される。

母子関係示す10項目を説明変数、親しみ順位を従属変数としてカテゴリカル回帰分析を施した。結果は表27に掲げた。

多重R =.402、R 自乗=.162 、 p =.000 n =288

このことからこの分析モデルは有意である事が分かる。標準回帰係数（ベータ）をみると、母親とよく話

表24 標準回帰係数（父親/男子） n =326

項 目	ベータ	有意確率
父親とよく話す	.188	.000
父何かにつけ行動に口挟む	.045	.389
父気持ち分かろうとする	.116	.049
父私に温かい	.128	.030
父私に折れてくれる	-.008	.873
父考えを押し付ける	-.188	.000
父悩み事聞いてくれる	.212	.000
父怒ってもこわくない	.066	.179
父私に期待かけている	-.052	.326
将来父と同じ生き方したい	.061	.231

従属変数: 親しみ順父
多重相関係数=.518 (p =.000)
R2乗=.269

表25 標準回帰係数（母親/男子） n =330

項 目	ベータ	有意確率
母親とよく話す	.226	.000
母何かにつけ行動に口挟む	-.081	.091
母気持ち分かろうとする	.092	.110
母私に温かい	.187	.000
母私に折れてくれる	.117	.006
母考えを押し付ける	-.005	.992
母悩み事聞いてくれる	.035	.719
母怒ってもこわくない	-.087	.050
母私に期待かけている	.066	.239
将来母と同じ生き方したい	.031	.715

従属変数: 親しみ順母
多重相関係数=.505 (p =.000)
R2乗=.255

すこと、のみが有意となっている。なお、悩みを聞いてくれるが有意な傾向性を示している。説明変数を母親とよく話す、悩みごとを聞いてくれる、の2項目に設定し、再度カテゴリカル回帰分析を施したところ表28の結果を得た。標準回帰係数はいずれも有意となった。母親とのコミュニケーションの親密さが母親に親しみを感じる主要因であることが示唆された。

3.4 総合的考察

重要他者へ親しみを感じる順位を従属変数、親子関係に関する10項目を説明変数としてカテゴリカル回帰分析を施したところ、すべて有意となった。すなわち、中学生男子のそれぞれの父母への親しみを感じるこの回帰分析の結果、中学生女子のそれぞれの父母への親しみを感じるこの回帰分析の結果はいずれも有意となった。つまり、親しみを感じる要因は親しみを感じる順位と関連のあることを示唆している。男女共通、父母共通に有意となった説明項目は「よく話す」

表26 標準化係数 (父親/女子) n=282

項 目	ベータ	有意確率
父親とよく話す	.230	.000
父何かにつけ行動に口挟む	-.066	.244
父気持ち分かろうとする	.029	.652
父私に温かい	.025	.698
父私に折れてくれる	.025	.664
父考えを押し付ける	-.132	.026
父悩み事聞いてくれる	.070	.259
父怒ってもこわくない	.036	.520
父私に期待かけている	.102	.074
将来父と同じ生き方したい	.188	.002

従属変数: 親しみ順父
多重相関係数=.491 (p=.000)
R2乗=.241

表27 標準回帰係数 (母親/女子) n=288

項 目	ベータ	有意確率
母親とよく話す	.229	.000
母何かにつけ行動に口挟む	-.037	.522
母気持ち分かろうとする	.053	.451
母私に温かい	.054	.419
母私に折れてくれる	.021	.731
母考えを押し付ける	-.078	.190
母悩み事聞いてくれる	.116	.075
母怒ってもこわくない	.002	.968
母私に期待かけている	-.002	.972
将来母と同じ生き方したい	.066	.272

従属変数: 親しみ順母
多重相関係数=.402 (p=.000)
R2乗=.162

であった。親しみを感じるものの順位の説明変数を検討した結果、男女とも父母に対して親しみを感じさせる要因が「よく話す」ことであることが明らかになった。親しみを感じるからよく話すのか、よく話すから親しみを感じるのか、その因果関係については断言できない。

「よく話す」以外の要因の効果は父親ないし母親、男子ないし女子で異なる。男子において「温かいこと」は父親、母親に対していずれも有意であるが、女子の場合両親に対していずれも有意となっていない。

Significant Othersとして父母が生き方のモデルとなっているかを考えると、「父と同じ生き方をしたい」要因のベータを見ると、女子のみで有意となっている。つまり女子は対象性の親を生き方のモデルとして選ぶ場合があるが、男子は父または母と同じ生き方をしたい、という同性親あるいは対象性の親を生き方のモデルとして強く感じていないということである。

表28 標準回帰係数 (母親/女子) n=288

項 目	ベータ	有意確率
母親とよく話す	.226	.000
母悩み事聞いてくれる	.213	.000

従属変数: 親しみ順母
多重相関係数=.355 (p=.000)
R2乗=.126

おわりに

中学生が、生き方のモデルとしてどのような人物を設定しているか、重要他者としての父親、母親に対する親子関係認知について検討した。生き方モデルの対象として選択されたのは、スポーツ関係者、芸能人、先輩が上位を占めた。男子ではスポーツ関係者、歴史上の人物が多く選択され、女子では先輩、母親、同性友人が多く選択された。

両親への親しみを感じるものの親子関係要因でのカテゴリカル回帰分析によると、中学生の性別により差異のある事が明らかになった。男子の場合は、親しみを感じる説明要因としてより多く有意になったが、女子の場合はそうではなかった。父母への親しみを感じる主要因は、「よく話す」ことが明らかになった。

本稿では、親子関係を中心に検討したが、友人と親しみを感じる要因の分析、担任の先生に親しみを感じる要因の分析が残された課題である。

参考・引用文献

安達喜美子、菊池龍三郎、木村精一 1987「大学生の生活に及ぼす他者の意味」茨城大学教育学部紀要（教育科学）36号 pp.173-187.

天野洋子、安里葉子、新城正紀、上田礼子 2001「自己開示性と重要他者との関係」沖縄県立看護大学紀要 第2号 pp.36-44.

Andersen,S.M.,Chen,S. 2002 'The Rerational Self: An Interpersonal Social-Cognitive Theory' Psychological Review. V.109,no.4,pp.619-645.

比嘉真麻美子、高良美樹、岡本裕子 2005 「『意味ある他者』の存在と大学生の未来展望との関連」『広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要』第4巻 pp.78-89.

松田 惺、若井邦夫、小嶋秀夫 1995 「発達における重要他者（メンター）との関わりの分析」『愛知教育大学研究報告 44（教育科学編） pp.101-120.

(付記)

- ①本調査研究にご協力いただいた3中学校の校長先生はじめ教諭の皆様、そしてアンケートに回答いただいた生徒の皆様にお礼申し上げます。
- ②本研究の一部は日本教育心理学会2010年度大会（於早稲田大学）で発表したものである。

Significant Others among Junior High School Students

Yoshitake Oshiro

Abstract

The purpose of this article is to discuss responses to the following three questions: (a) who are significant others among junior high school students; (b) what is the familiar ranking to the father, the mother, the close friend, the teacher as the significant others; and (c) how are parent-child relationship factor and familiar ranking related? One-thousand eighty-eight junior high school students responded to the questionnaire. Removed from analysis are questions that incomplete answers.

Main results are as follows.

Answers to the question, "Who are the significant others?" varies according to the different sexes. The significant others for boys were athletes (42%) and celebrities (23%). The significant others for girls were "big sisters" (31%), celebrities (26%), mother (26%), and friends of the same sex (23%).

The average order of familiarity was mother, close friends, father, and homeroom teacher.

The parent-child relationship factor, which refers to familiarity, was "we talk often."

The result of the categorical regression analysis was as follows.

The father-boy: Multiple $R=.518$, the R square $=.269$, $p=.000$ $n=330$

The father-girl: Multiple $R=.491$, the R square $=.261$, $p=.000$ $n=282$

The mother-boy: Multiple $R=.505$, the R square $=.255$, $p=.000$ $n=330$

The mother-girl: Multiple $R=.402$, the R square $=.162$, $p=.000$ $n=288$